

四万十町文化的施設 基本設計業務プロポーザル 提案書

株式会社スターパイロッツ + 有限会社建築設計群無垢
設計企業体

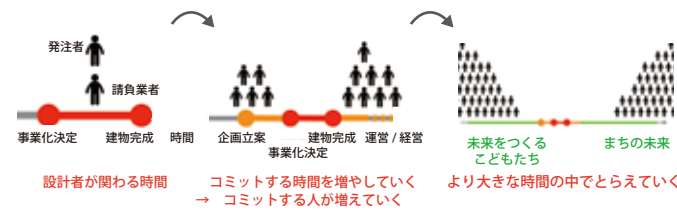
①本業務の実施方針 ②設計の基本方針(コンセプト) ③敷地利用の考え方(建物の配置計画(駐車場含む)等) ④建築物の提案(構造・階数・機能・意匠等) ⑤施設とまちのつながりに関するビジョン提案 ⑥その他

町民ひとりひとりを肯定する寛容な公共空”環”

1-1 未来へつながる「物語」を編む

人口1万7千人、高齢化率40%を超える四万十町は、現在年間約300人のペースで人口が減り続けています。こういった状況のなかでこの町ならではの新たな公共施設を考えていくためには、単なる設計請負業者ではなく、未来に向けて「都市経営」的なまなざしを併せ持った設計者と行政のパートナーとなって、継続的な関係を築いていくことが大切です。

私たちの事務所が最も得意とすることは、多様なひとびとが参加したくなるまちの「物語」をつくることです。通常的设计事務所とは異なり、設計から竣工までの業務ではなく、より長いタイムスパン、つまり企画や計画段階から併走し、建物完成後も時にリスクを共有しながらパートナーとして継続的に運営・経営に携わるという姿勢をとっています。そして究極的にはより長い時間軸、つまり未来のまちを豊かにする人材、こどもたちを一人でも多く増やすということを理念としています。



近隣居酒屋店主
昔に比べたら人通りはめっきり減ったよね



1-2 施設に期待していない人こそが未来の利用者

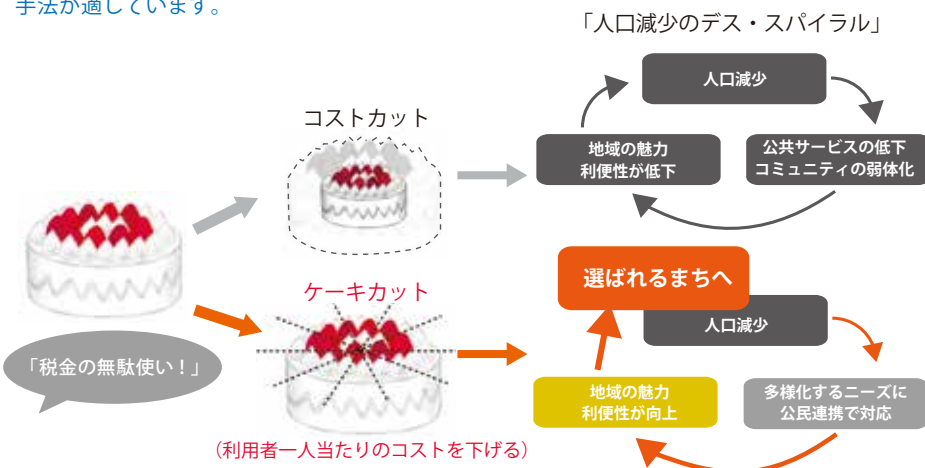
今回の施設建設計画をひとつの箱モノプロジェクトとしてではなく、まちづくりの大きな契機として活用すべきです。しかしながら実際に町を歩いて町民の方々に話を伺うと、「税金の無駄だ」「そんな立派な施設はいらない」などという声も少なくありません。

「コスト削減」には大きく二つの方法があります。一つは事業費を減らすこと。もうひとつの私たちが「ケーキカット」と呼ぶ手法、つまり利用者数を増やすことで実質一人当たりの負担額を減らす、という方針です。

今まで図書館には来なかった人たちが来るためにはどうしたらよいか、そのためのサービスはどういったものなのか、ということ町民と共にとことん考えることが結果的に「コスト削減」になります。まずはそういった意識を町全体で共有することから始めましょう。

※ 公共サービスへの投資について

人口減のまちで公共サービスのコストカットを行うと、さらなる悪循環を生み出す可能性が高いため、施設利用率を上げることにより、一人当たりの負担額を減らす「ケーキカット」の手法が適しています。

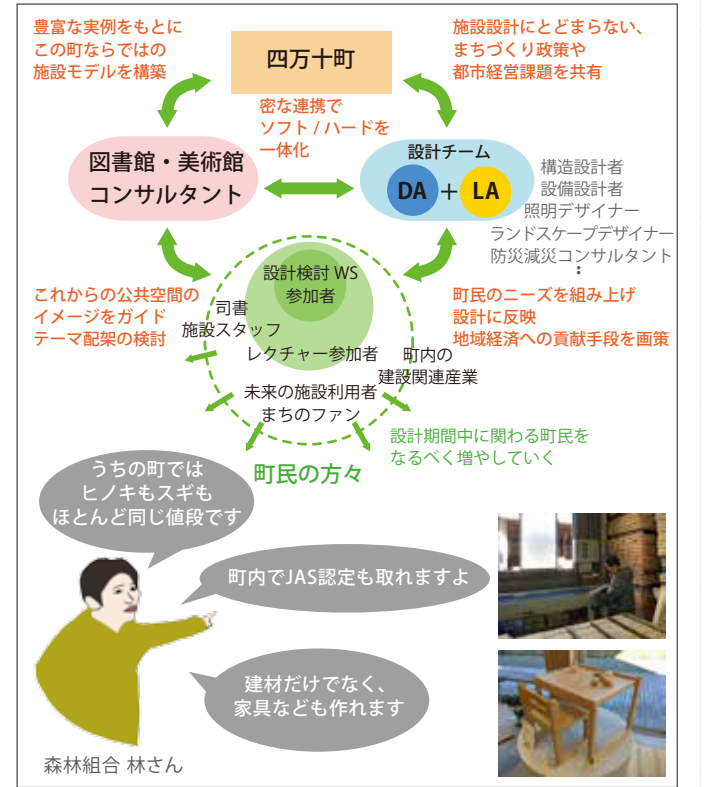


1-3 地域の宝物を再編集するJV体制

私たちは、全国各地の公共施設やまちづくりに携わる「ディレクション・アーキテクト(DA)」と、高知県を中心に四万十町でも仕事を手がける「ローカル・アーキテクト(LA)」の2社JVを中心としたチームです。DAは日本各地のおもに過疎の市町村でまちづくり、都市経営に携わりながら、現在はまったく新しいタイプの図書館計画にも3つの自治体と取り組んでいます。都市経営的なまなざしを持ってまち全体を俯瞰しながら他地域との差別化を図り、未来のまちの進むべきビジョンを導いた上で施設の設計を統括していきます。

LAは地域の気候風土はもちろん、地元の林業、製材状況などにも精通し、人的ネットワークも豊富に持って、誠実な仕事ぶりは地域でもすでに信頼を得ています。設計にあたり材料や加工だけでなく、さまざまな業種人材を地域の中から最大限活用し、地域経済を循環させるには、このような立場が必須です。また建物完成後の緊急時のトラブルや末長いメンテナンスなどを考えると、LAがいることは受注者にとって大きなメリットとなります。

この2社を中心に、構造や設備、照明デザイナー、防災減災コンサルタントなどさまざまな専門分野がチームに入りますが、受注後に信頼のおける「図書館コンサルタント」にも加わってもらう予定です。また、それ以外のたとえば家具デザイナー、サイン・グラフィックデザイナーなどは、できれば町内もしくは近圏にお住いの、地域にゆかりと愛着のある方をお願いしたいと考えています。



森林組合 林さん

1-4 スケジュールと業務内容

公園と図書館は公共空間のなかでも、最も誰もが入りやすく使いやすい、日常の居場所であるべきです。よって建設のプロセスにおいても誰ひとり排除せず、賛成派/反対派などの分断が起こらないよう最大限配慮します。

そのためにも、設計～工事期間中に定期的に町民参加型ワークショップを開催したいと思います。それぞれの回に段階に応じてテーマを設け、参加者が自分の頭で考え、発言することで、新しい施設を町民ひとりひとりが「自分たちの場所だ」という認識を持つきっかけになります。ただ最近、それだけでは不十分であることが分かってきました。そこでワークショップ以外に、連続レクチャーを企画したいと思います。それはより広く町内外の人に向けてディレクション・アーキテクトやテーマに応じた専門家が、一般の方々にもわかりやすく、楽しく、「聞いてよかった」と思えるような話題や最新事例などを提供します。レクチャーの際はslido※などのアプリを用い、会場の疑問や質問をより気軽に受け付ける双方向対話型のコミュニケーションを実行します。

こういったワークショップとレクチャーを交互に定期開催することにより、常に門戸を開き、ワークショップ参加者の固定化・孤立化を避け、かつ参加者に対して「出会い」「学び」の機会となることでワークショップでの活動がさらに充実するはずで。

※slido: 手を挙げずにチャット感覚で講演者への質問が可能なアプリ。リアルタイムにスクリーンへ表示し、共有が可能。

	令和2年												令和3年		
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	
マスター工程	基本設計(6カ月)						実施設計(6カ月)						発注準備		
設計	配置検討		設計案検討				まとめ		条件整理		一般図作成		詳細図作成		調整
双方向対話型レクチャー	第1回「未来のまちの公共空間」～これからの公民連携～		第2回「まちの幅と奥行」～まちの多様性と記憶～				第3回「つくるからつなげるへ」～エリアリノベーション～								
市民参加ワークショップ	第1回「まちの宝物を集めよう」		第2回「まちの宝物をつなげよう」				第3回「まちの宝物を伝えよう」								
運営管理方針検討	要望ヒアリング		運営検討												
コスト(概算/積算)	目標設定		概算				VE検討						積算		調整
許可/申請関係各種法令手続	事前相談		早期事前協議を実施				事前相談		各所相談		行政協議		許可申請・確認申請など		

※枠の大きさを変えないこと

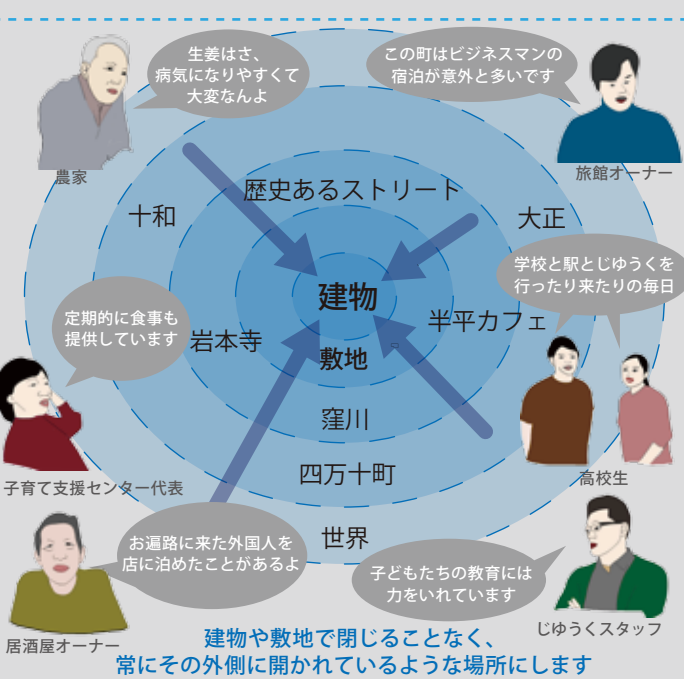
①本業務の実施方針 ②設計の基本方針(コンセプト) ③敷地利用の考え方(建物の配置計画(駐車場含む)等) ④建築物の提案(構造・階数・機能・意匠等) ⑤施設とまちのつながりに関するビジョン提案 ⑥その他

2-1 コンセプト

インクルーシブな「文化創造の場」をめざす

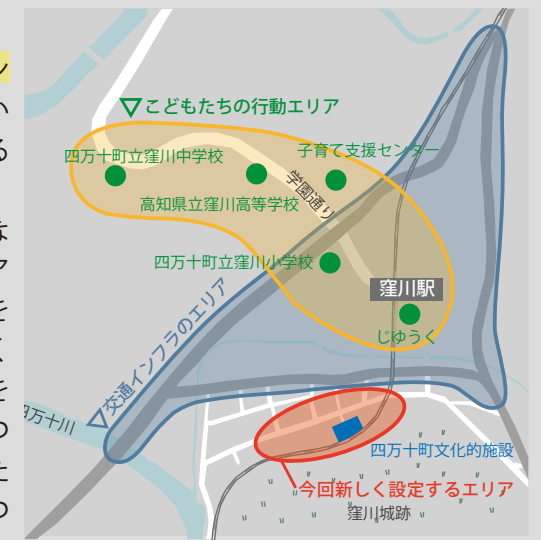
図書館や美術館は、住民の知る権利を保障する場所です。よってすべての人たちに柔軟性のある機会と環境を約束する、寛容でインクルーシブな空間でなければなりません。「高齢者」「子育てママ」といった利用者のターゲティングは本来すべきではありません。そうではなく、この町の高齢者にとってはどんなサービスが必要なのか、この町の子育てママのとなり町との状況の違いは何か、ということをしていねいに紐解いていくしかありません。小さな自治体は大都市に比べてそれがやりやすいということがこそメリットです。

私たちは限られた時間のなかでなるべく多くの町民の人たちに直接会い、いろいろな話を聞きました。それだけでもこの町の公共空間に求められる姿がぼんやり見えつつあります。ワークショップだけでなく、設計期間にもこういったヒアリング、地道なフィールドサーベイを継続し、市民生活のニーズに関する情報精度を上げていきたいと考えています。またその過程で、地域の人たちと信頼関係を築き、人をつなぎ、ハードとソフトの両輪で四万十町の生活の質を向上させていきたいと思ひます。



エリアリノベーションの思想

私たちが全国各地で手がけている「リノベーションまちづくり」という手法は、縮退時代に有効とされる新しい都市計画戦略です。建物単体で機能やサービスを考えるのではなく、まずその周辺、徒歩圏内(半径100m程度)をひとつのエリアと捉え、そこにすでに在るさまざまな可能性(ポテンシャル)を徹底的に洗い出し、そのエリアの進むべき近未来を予想し、隣接するエリアと差別化を図りながらブランディングしていきます。その上で、新しく生まれ変わったエリアにおいて、その建物が担う役割を考えていくことで、エリア全体が同じ方向を向き、かつ連携し合えるような関係を結んでいくのです。限られたリソース(資本)で最大限の効果上げるには、ひとつのエリアとして官民間わず相互補完しながら、魅力的な一帯を形づくるよう連携していくべきです。



新施設周辺は「新しいエリアとしての魅力(キャラクター)」を今まさに必要としています

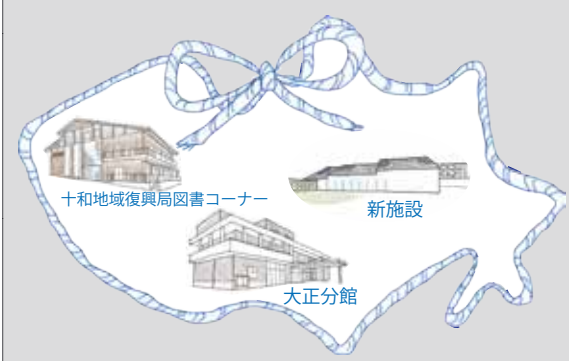
記憶の継承でまちをひとつの図書“環”にする

3つの町や村が合併してできた四万十町において、本計画が窪川のためだけではなく、大正分館や十和の図書コーナー、さらにはまち全体にとっての利益となるためのアイデアが重要です。

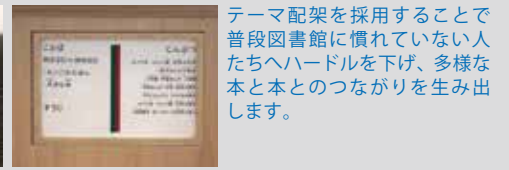
図書館が生活に根ざした市民の居場所であることはもちろんですが、もうひとつ重要な機能として「記憶や情報の記録保存」があります。一旦失われれば二度と取り戻すことのできない貴重な資料は町民の共有財産として保管され、未来へバトンタッチされなければなりません。にもかかわらず、四万十町の歴史資産は知らず知らずのうちに失われようとしています。

新施設建設を契機に、町に散らばる貴重資料のデジタル・アーカイブ化を進めましょう。それらは町の共有資産となります。もちろん過去の資料だけでなく、日々の活動記録などもきちんと保存していきましょう。それらがどの施設からでも気軽にアクセスできること、データベースの共有こそが、これからの施設連携の基本となります。

またこれを機に3つの図書施設において、十進分類にとらわれない、知的好奇心を満たす「テーマ配架」を連携スタートさせ、それぞれの特徴を打ち出しながら、町民の新しい学びを支えていくことを提案したいと思います。



窪川全景



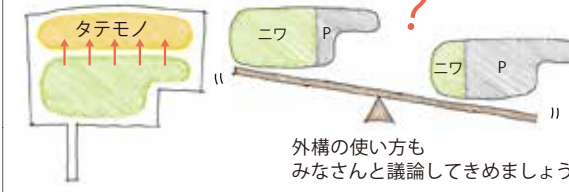
テーマ配架を採用することで普段図書館に慣れていない人たちがハードルを下げ、多様な本と本のつながりを生み出します。



今後はさらなる情報化のために、記録保存以外のICT化についても検討していきます。

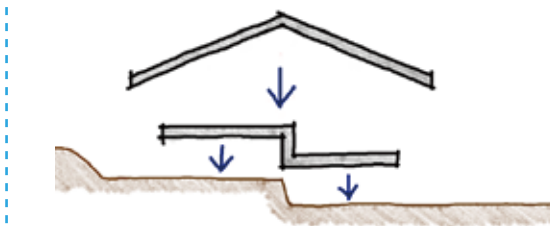
2-2 設計方針

建物配置



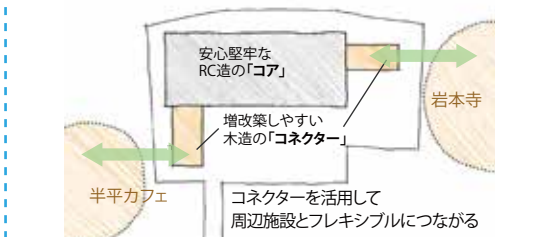
施設の将来への余白を残し、拡張性を確保するため、建物の配置はなるべく敷地奥に寄せるべきと考えます。また建物全体のアクセスを考えると平屋が望ましいですが、そうすると建築面積が多くなってコストも上がり、駐車場などの外構面積も確保できません。逆に総2階建てにすると建築面積は小さくなりますが、動線や複合施設としての空間的魅力は損なわれることとなります。よって今回はその中間(平屋一部2階建て)を提案します。

土地形状を活用する



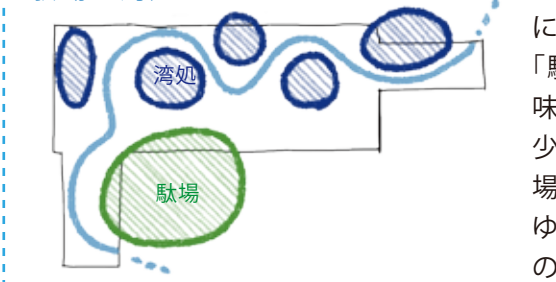
窪川城から見付川へ向かって下がっていく地形はこの町の歴史そのもので、敷地内の高低差もその一部です。私たちは現状の土地形状を最大限活用し、それに馴染むような建築を提案します。土工事を最小限にして土壌の搬出入を限りなくゼロに近づけることで、環境への負担を減らし、工事費を削減します。

コアとコネクター



本施設は貴重資料を保管する役割を担うため堅牢で安心安全なRC造を主とし、それを「コア」と名付けます。また隣接する半平カフェや岩本寺とも今後関係を持ちやすくするために、比較的増改築しやすい「コネクター」と呼ばれる、高知県らしい木造・木質のボリュームがそこに付設されます。「コネクター」は施設に訪れる人々を温かく迎え入れるゲートとしての役割も担います。

だば わんど 駄場と湾処



四万十川の豊かな流れに呼応するように、建物内外に「だば」と「わんど」という空間のたまりを設けます。「駄場」は人が集まり交流するひろけた場所を意味し、「湾処」は流れのなかにある小さなたまり場で、少し落ち着いた雰囲気や新たな出会いを生み出す場所を指します。これらが区切られることなくゆったりと流れるようにつながるのが、これからの四万十町の公共空間のイメージです。



※枠の大きさを変えないこと

①本業務の実施方針 ②設計の基本方針(コンセプト) ③敷地利用の考え方(建物の配置計画(駐車場含む)等) ④建築物の提案(構造・階数・機能・意匠等) ⑤施設とまちのつながりに関するビジョン提案 ⑥その他

窪川城跡

ハイサイドライトからの自然採光を活用することで昼間の照明利用を抑え維持費を低減します

多様な学習の場面にに対応した読書・学習室を提供します

親子と一緒にくつろげる場所があるといいな

子育て中のママ

ママのお気に入り雑誌はキッズコーナーのそばに

「図書館って少しくらいにぎやかな方が落ち着くなあ」

大きな畑が病気になるたら図書館で調べよう

図書館は健康から相続、職探し、生活の相談窓口です

半平カフェ

半平カフェからの飲食の持ち込み半平カフェへの本の持ち込みをスムーズにするために、通り抜けのエントランスを設けます

大人数のイベントとなると今の和室だと少し手狭かな

図書館に来た人たちが本を持ってうちのカフェに気軽に来てほしいな

半平カフェ井上さん

嶋岡さん

「この辺に音楽スタジオなかったんだよねあ」

誰もが居心地よく感じられるよう十分な座席数を確保します(140席程度)

展示の入れ替えに配慮して美術資料展示コーナーと収蔵庫は隣接して計画します

展示の入れ替えに配慮して美術資料展示コーナーと収蔵庫は隣接して計画します

スタジオは隣接する展示コーナーとの連携も可能です

交流コーナーからのぞけることで積極的な利用を促します

芝生広場

美術館の屋外活動も行える芝生広場は交流コーナーと一体利用できる「駄場」となります

美術館の屋外活動も行える芝生広場は交流コーナーと一体利用できる「駄場」となります

大階段を座席代わりにして交流コーナーでオープン・レクチャー

将来的には行き来ができるように

出張ビジネスマンがオフィス代わりに

静寂読書室

グループ学習室

デッキガーデン

女子トイレ

男子トイレ

読書室

木漏れ日が差し込む静かなハナレ

岩本寺

よみきかせコーナー

歴史資料展示コーナー

書架の一角に開放された展示コーナーは気軽に利用することができ、まちの歴史を学ぶことができます

交流コーナーを見下ろすバルコニー

美術展示を見下ろせる場所

読書資料展示コーナー

2階から芝生を見下ろす特等席

会議室

書庫

女子トイレ

男子トイレ

多目的トイレ

更衣室

作業室

事務室

アトリエ

エントランス

アトリエ

独立利用しやすいアトリエ

読書資料展示コーナー

美術資料展示コーナー

収蔵庫

機械室

荷捌き室

搬入口

周囲と手を結ぶための意匠

窪川は瓦を用いた美しい屋根の町並みが今なお残っていて、これは町の文脈であり財産です。新施設は周辺建物に比べてボリュームが大きくなりがちですが、同じ材料とプロポーションを用いながら、圧迫感を与えず実際よりも小さく見えるようなデザイン配慮を施すことで、周囲の風景に溶け込むような建築にしたいと思います。

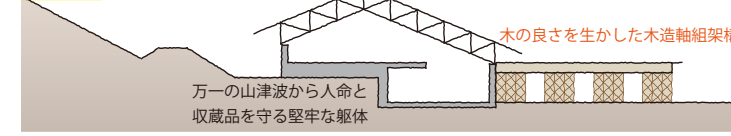
複合施設ならではの豊かさ

図書館の中に展示機能を散らばせるように計画します。そうすることで美術に気軽に触れられるようになるだけでなく、各展示のそばに関連書籍を配架することで、まなびのきっかけを提供します。

書架や展示什器にはできるかぎり地産材を使い、町内の生産者の手を借りることで、町全体でつくりあげる文化施設を目指します。将来的な蔵書の増加にも対応できるよう十分に余裕のある書架配置を検討します。

こころの拠り所となるために

敷地の南側の斜面からの山津波と水害リスクを想定して、鉄筋コンクリート造による堅牢な躯体を主架構に採用します。万一の災害時には、一時避難または救護所としての活用を想定し、耐震等級2相当の耐震設計を行います。屋根は軽快な鉄骨または、木+鉄骨の複合梁による、大スパンのトラス架構とし、豊かな気積の快適な一室空間の読書空間を実現します。隣地へ伸びる平屋のエントランスやハナレは、例えば組子の耐力壁等、木の良さを活かした軸組の架構とします。

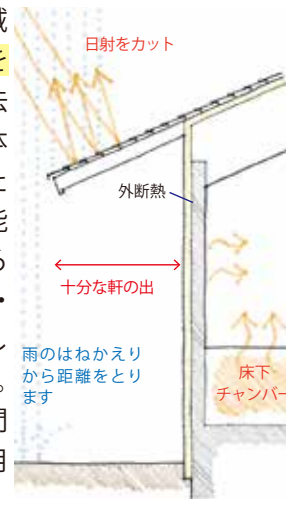


永く引き継がれるために

高気密・高断熱化を計りながら大きく軒を出すことで環境負荷を低減し、ランニングコストを削減します。外断熱工法とすることで、RC躯体からの放射熱を利用した室内の冷暖房が可能です。軒の深さがあることで、外壁への日射・雨のはねかえりを抑制し外装の劣化を抑えます。また、軒下は半屋外空間として室内との一体利用も可能です。

誰もが心地良い場所

床からの空調吹き出しによる輻射冷暖房効果を利用した、居住域空調を行います。人の背の高さ以上の天井から吹き出す従来の冷暖房に比べて、体感温度も優れ、更には居住域のみのエネルギー消費で省エネ化を図ることができます。高屋根により夏の熱気を上部にため込む日本古来の民家の熱環境を作り、居住域の快適性を高めます。湧水対策として1階山側および収蔵庫は二重壁を検討します。また二重壁内部も換気することでコンクリートからのアンモニア・湿気対策による収蔵品へのダメージを防ぎます。



二重壁イメージ

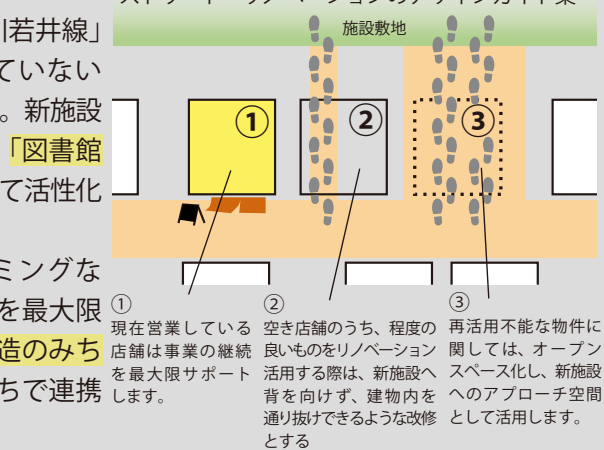
名もなき道から「図書館通り」へ

新施設の入り口となる「町道窪川若井線」はその正式名称をほとんど知られていないばかりか、現在呼び名すらありません。新施設建設をきっかけにこの道をたとえば「図書館通り」と名付けて、一体のエリアとして活性化してはどうでしょう。

魅力的な個人商店も多く、チャーミングな佇まいの空き物件多いため、これらを最大限活用しながら、歩行者中心の文化創造のみちとして、施設運営とさまざまなかたちで連携していくべきです。



ストリート・リノベーションのデザインガイド案



※枠の大きさを変えないこと

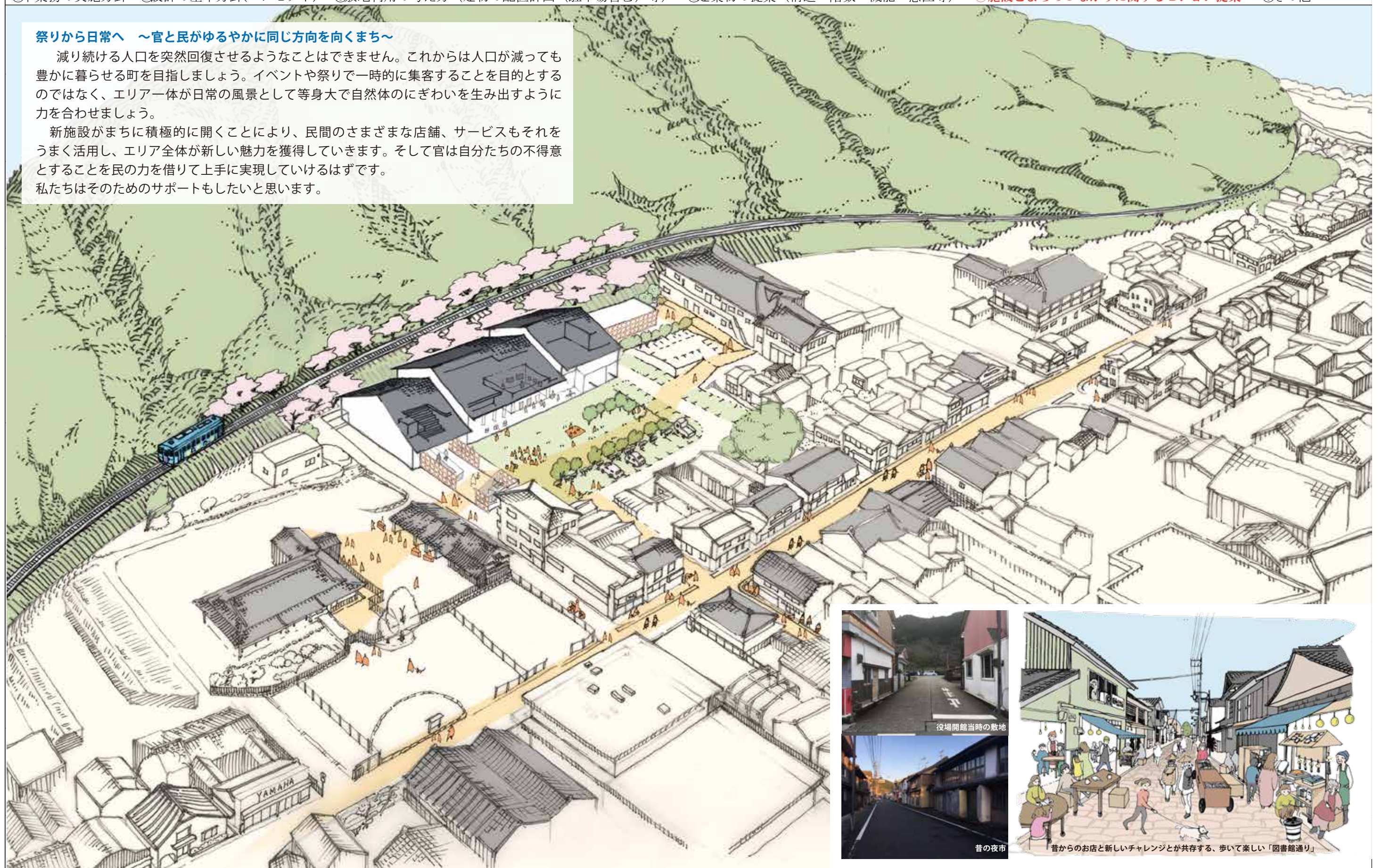
①本業務の実施方針 ②設計の基本方針(コンセプト) ③敷地利用の考え方(建物の配置計画(駐車場含む)等) ④建築物の提案(構造・階数・機能・意匠等) ⑤施設とまちのつながりに関するビジョン提案 ⑥その他

祭りから日常へ ～官と民がゆるやかに同じ方向を向くまち～

減り続ける人口を突然回復させるようなことはできません。これからは人口が減っても豊かに暮らせる町を目指しましょう。イベントや祭りで一時的に集客することを目的とするのではなく、エリア全体が日常の風景として等身大で自然体のにぎわいを生み出すように力を合わせましょう。

新施設がまちに積極的に開くことにより、民間のさまざまな店舗、サービスもそれをうまく活用し、エリア全体が新しい魅力を獲得していきます。そして官は自分たちの不得意とすることを民の力を借りて上手に実現していけるはずで

私たちはそのためのサポートもしたいと思います。



※枠の大きさを変えないこと